

キャンパス・アジア留学報告書

教養学部文科2類2年

松井拓海

はじめに

私は2018年2月21日から7月2日までの約4ヶ月間、キャンパス・アジアプログラムで北京大学の元培学院に留学しました。実際には来期も9月から1月まで留学を延長するのですが、プログラムとしては一学期ごとに区切りとなるということもあり、この4ヶ月間の中国留学の経験をシェアしたいと思います。これからキャンパスアジアのプログラムで留学しようと考えている人にとって参考になれば幸いです。

先に学年について書いておくと、留学に応募した当時は経済学部内に内定していたものの、経済学部の方針で3A時の留学が認められず(!?)、そのまま留年して内定を取り消し、前期教養学部2年生として留学しました。

またこのプログラムは半年のプログラムですが、私は最初からこのプログラムを一年間に延長するつもりでこの半年間を過ごしました。そのため、今学期は中国語の習得と中国人の友人作りを第一の目標にして活動しました。

目次

- ・はじめに
- ・渡航前のいろいろ
 - ・留学をした経緯
 - ・留学をした目的
 - ・その他：東大の留学制度など
- ・北京大学での生活について
 - ・寮生活
 - ・履修した授業
 - ・ランゲージパートナー
 - ・元培学院の交流活動
 - ・日本人との交流
- ・北京大学以外での活動
 - ・体験活動プログラム
 - ・京劇評論協会の方々との交流
 - ・中国茶教室

- ・日本語教室
- ・中国国内の旅行について
- ・半年間留学をして(感想)

渡航前のいろいろ

留学をした経緯

正直にいうと、留学したきっかけは偶然です。仲の良い友人が先にこのプログラムで留学することが決まっており、その友人の紹介で追加募集の空いていた枠に応募しました。

事前から北京大学に留学することを念頭に準備をしていなかったもので、中国語は大学一年生の初級中国語で勉強したきりになっており、留学が決まってから出発するまではとにかく中国語の復習に時間を割きました。

留学をした目的

僕が留学をしたのは日本と地理的には近いようで、人口も政治体制も経済発展も全然違うように見える中国という国を通して、自分が生まれた日本という国を相対化したいという思いがあったからです。別に欧米諸国でもよかったですのですが、どちらかという中国の方が欧米諸国よりも得体がしれない、という好奇心と、あとは偶然の結果中国を通して日本を見てみることにしました。

ただ、表層的な習慣習俗の違いだけを知って満足するのでは異文化理解とは言い難く、現地の学生だけでなく様々な中国人とのコミュニケーションを通して中国社会を理解して見たいと思いました。そして今学期はその手段としての中国語の習得と友人作りに徹したいと思いました。また夏休みを中国に関する知識、学問的理論等のインプット期間とし、次期の留学で今学期に感じた疑問を追究していきたいと考えました。

その他：東大の留学制度など

- ・単位認定は前期教養学部に関してはできないということでした。
- ・キャンパス・アジア留学は全学交換留学とは違うプログラムのため、中国政府からの奨学金に加え、申請すれば東大の半年から一年の短期奨学金(北京だと月5万円くらい)をもらうことができます。

僕みたいに手続きが遅れてもらい損ねることがないように、留学が決まったら早めに申請しましょう。

・経済学部では3Aが始まる前からの留学は認められませんでした。詳しくは経済学部の教務課に聞いてください。

北京大学での生活について

寮生活

僕が住んでいた寮は政府奨学金をもらっている留学生の寮で、大学と道路を一本隔てたところにありました。僕たちが住んでいたのは二人部屋で、それぞれにベッドと机とクローゼットと共用の洗面台とテレビ、湯沸かし器が付いています。それ以上の家具はルームメイトの財力に依ります。僕のルームメイトはオーストラリア人の修士の学生でした。すでに一年半北京大学に留学していて冷蔵庫やソファ、空気清浄機などを使わせてくれました。部屋によってはルームメイトの相性が合わないこともあるようですが、相手が年上で留学に慣れていたこともあり、一緒にご飯を食べたり W 杯を観戦したりと。とても快適に過ごせました。

履修した授業

このプログラムでは英語、中国語問わず、北京大学で開講されるほぼ全ての授業を履修することができます。(ただし軍事理論や毛沢東の思想の授業は履修登録できませんでした。)

留学前は内容の簡単そうな中国語の授業と英語の授業を半々で履修しようと思っていたのですが、中国語の習得に力を入れたかったことため結局は中国語の授業に絞って履修しました。

授業が始まったばかりの頃は予習の教科書を1ページ読むのに1時間かかるレベルで、スライドの漢字で内容を推測するだけで精一杯でしたが、徐々に聞き取れる量が多くなって終わり頃には7割くらいは理解できるようになりました。

ただ期末評価が筆記試験の授業は中国語のレベル的にとっても大変だったのでオススメはしません。一度中国経済專題の中間試験は過去問を手に入れて回答を暗記して乗り越えましたが、めちゃくちゃきつかったので、レポートだけで成績がつく授業をオススメします。

また私の場合は途中から授業の予習をメインにやるのではなく、日本から持ってきた中国語のテキストを中心に中国語の学習を進め、空いた時間に授業の予習・課題をやるように勉強習慣を変え、授業内容の把握よりも先にそれについていけるだけの中国語の取得に力を入れました。(おかげで留学3ヶ月で最高級の HSK 6 級を受験し、約 2/3 点を取れました。)

履修した授業は以下の4つです。カッコ内は(曜日と時限/使用言語/受講者数)

- ・バスケットボール(火曜1限/中国語/30人)
- ・中国経済思想史(水曜3限/中国語/100人)
- ・中国人文地理(木曜2限/中国語/60人)*留学生向け授業
- ・中国経済專題(金曜5限/中国語/300人)

ここでは詳しく授業の内容に立ち入ることはしません。ただ学部の授業ですし、正直「本読めば分かる」系の授業が多かった気もするので、期待しすぎてもなぁという気がします。

あと、体育系の授業を取ると、運動を通じて中国人の学生の知り合いが増えるのでいいと思いました。

ランゲージパートナー

寮に住んでいたこともあり、意識しないと中国人の学生と知り合う機会は正直なところあまりありません。そこでまだ中国語が不慣れな僕が使ったのがランゲージパートナー制度です。留学生向けに国際系の学生団体や日中交流団体が集めているところもあればその他いろいろな経路を使ってランゲージパートナーと出会うことができます。

僕は二人のランゲージパートナーと週2〜3で会って、作文の添削をしてもらったり逆に日本語を教えたりしました。僕は彼らのおかげで作文力が飛躍的に伸びました。また言語を教え合うだけでなくお互いの文化の違いについて話し合ったり、またご飯や旅行に行ったりすることもありました。

日本の文化(特にアニメ)や日本語に興味がある中国人の学生は意外と多く、ランゲージパートナー探しには困らないと思います。

ただ定期的に会うとなるとどうしても相手と相性があるかどうかが大事になってきます。いきなり一対一で会うよりも頻繁に開かれる日中交流会などの活動に参加して相性が会う相手を探すほうが良いと思います。

元培学院の交流活動

全学交換留学では学部には所属することはできませんが、キャンパス・アジアプログラムの強みの一つが元培学院という学部には所属できることです。元培学院は北京大学の中の教養学部のような学部で、そこに所属する学生は(東大のように全学生が所属するわけではない)3年生に進級するときにそれぞれの学部を選ぶことができます。

その元培学院の学生が参加できる活動がいくつかあり、今学期は元培学院に留学している学生の交流会と中国人の学生も混じっての考古学演習という名の泊りがけの旅行みたいなものがありました。考古学演習では山西省の太原の遺跡や博物館を3日間で回るというもので、中国人の学生とのグループで活動しました。北京大学の考古学学部の先生がたが実物を見ながら解説してくれるなどとても有意義な演習となりました。(事後課題として5000字のレポートが課されたのはきつかったですが...)

日本人との交流

北京大学には正規課程の留学生、交換留学生合わせて100人以上の日本人が留学しています。交換留学生は早稲田と同志社の学生が多く、僕も同志社大に通う小中学校の友人とまさかの北京での再会を果たしました。

大きな団体としては北京大学日本人会がありますが、留学している日本人がほぼ全員入っている微信のグループチャットで就活情報が流れてくる以外はあまり活動はありませんでした。

ただ正規課程に通う日本人の方とは時々ご飯に行ったり、早稲田の留学生が作った中日交流会の活動に参加したりしたことはありました。

東大からも学部・大学院合わせて10名ほど留学生がいましたが、面白い研究をしている方もたくさんいらっしゃる一方で残念ながら交流が少なかったので、来期からは東大のネットワークを活用していけたらと思います。

北京大学以外での活動

体験活動プログラム

3月には北京に来た東大の体験活動プログラムの活動にも参加させていただきました。中国で有名なベンチャー企業や日本大使館を訪問し、また大使館に伺った際には横田大使と対談することもできました。学生もそれぞれ大使に対して自己紹介をしたのですが、大使が学生に対して「これからの人生で自分が一番大切にしたいもの」を聞かれたのが、とても印象に残っています。

京劇評論協会の方々との交流

今学期キャンパス・アジアプログラムで留学していたTLPクラスの友人が総合文化研究科の先生方ともつながりのあるという京劇評論協会の方々を知り合いだったことから月1、2回一緒にご飯に行ったり京劇を鑑賞させてもらったりしました。また京劇評論協会の会長さんは元々東大にも籍があった方で、夜遅くまで先生の家で話し合い、中国や日本の文化を教えてくださいました。文化大革命で多くの知識人が命を失った後自力で学んで来たその力強さと知識と興味の広さを目の当たりにし、中国の知識人とは何かを肌で感じることができました。先生の奥さんは日本人らしく、日本の文化にも幅広い知識も持っていて、北京で日本文化の素晴らしさを知らされるという不思議な体験もさせてもらいました。

中国茶教室

また京劇評論協会の方々とのつながりで、中国茶に詳しいお姉さんに日本人の学生数名と一緒に中国茶を5回ほど教えてもらいました。一般に出回っている中国茶は品質もばらつきがある上にある程度の大きさでしか売っておらず、通常はいろんな種類のお茶を飲むのにもなかなかお金がいるのですが、彼女は中国各地の産地に出向き自らお茶を買ってくるほどで、本当にいいお茶をいろいろと飲ませてもらいました。

本当にいい烏龍茶を飲むと、もうコンビニでは買えなくなっちゃいますよ...

日本語教室

同じく京劇評論協会の方々とのつながりで、日本語や日本文化に興味がある中国人を対象に、東大の留学生4名で日本語教室を5月から週一で開いていました。日数がそこまでなかった上、日本語の文法の難しさもあり、ただ文法を教えるというのではなく日本語で一分間ほどの簡単な自己紹介をできるようになってもらうことを目標に授業をしました。受講生の皆さんが簡単な文章でも使えるようになっていく過程を楽しんでくれたようで僕としても嬉しかったですし、また徐々に中国語で日本語の講義をすることができるようになって達成感がありました。(あと、少しですがバイト代も出て助かりました。)

中国国内の旅行について

当たり前ですが、中国はとてつもなく広いです。北京だけでは中国を知ることはできないだろうと思い、授業の合間をぬって(時には自主休講して)中国の国内を旅行してきました。今期訪れたのは、西安、太原(考古学演習で行きました)、厦門、福建省の山奥、黄山(世界遺産の有名な山でよく水墨画の題材になる)、乌镇(杭州の近くの昔の水の都)、南京です。

旅行記を留学の報告書に書いても参考にならないと思うので詳述はしませんが、中国のいろいろな側面を見るという意味でも、国内の旅行は面白かったです。次期もまた時間を探していろいろ行ってみたいと思います。

半年間留学をして(感想)

留学なんて良くない。せっかく進振りて選んだ経済学部は辞退して留年する羽目になったし、彼女とは別れたし、飯まずいし、夏クソ暑いくせに冬クソ寒いし、中国語全然分からんし。

上に書いたようにそれなりに中国っぽい活動にも参加したし、数人だけ仲の良い中国人もできたし、3000字のレポートも中国語で書けたし、hsk6級も6割取れるくらいにはなりました。

ただ、それらしい経験の肩書きなんてそれなりにやれば手に入ります。それに学部レベルで勉強するのならばまず日本語を使って日本でやればいいです。それに多くの学問はほとんど英語ができればオンラインで英語が読めるのだから、不用意に中国に留学する必要もない。中国でしか学べないような学問、例えば中国哲学にしても日本語である程度のレベルまでは学ぶことができるはずですよ。

それでも僕は、留学はやっぱり意味のあるものだったと思いたい。

その理由は大きく分けると4つあります。

1つ目は、周りにコミュニケーションの道具である言語から人脈まで何もない状況から、4ヶ月間で自分で納得できる成果を上げるにはどうしたらいいか、常に考え実行する必要があったことです。(実際にその目標としていた具体的な何かが得られたかという点、それはあまり重要ではなかったかもしれません。)

2つ目は、自分が生まれ育った国である日本の社会・文化をもっと知りたくなった、ということです。いかにも留学経験者っぽい感想で申し訳ないのですが、多くの中国人との交流を通じて、日本の文化というものを今までほとんど知らなかった自分が恥ずかしくなるとともに、その素晴らしいものにもっと触れてみたいという気持ちが強くなりました。また伝統的な文化だけではなく、中国においても圧倒的な人気を誇っている日本の漫画アニメ、またそれらを生んだ日本社会に関してももっと知りたいという思いが強くなりました。

3つ目は、そうした文化や習慣、言語などの違いから、社会とは何か、文化とは何か、

といった問いが膨らんだことです。簡単に言えば読みたい本が広がりました。

4 つ目は、日本での自分の生活、特に人間関係を客観的に捉えることができたということだ。今までで一番長く海外に滞在したこともあり、6月には日本に帰りたくてたまらなかったのですが、そこで帰りたと思える居場所があることのありがたさと、今までいかに自分がその居場所に依存し助けられていたかを改めて実感することができました。北京も僕の第二の故郷になってくれるだろうか、来期も引き続き精進したいと思います。

留学を通じて私を感じたことはこの程度に止めておきたいと思います。まだ自分の中で完全に整理がついていないものもあるし、留学をしたいと思う人にとってはそこまで重要な情報ではないはずだからです。

ただ留学しようか迷っている人がいたら、是非キャンパス・アジアの留学に参加してほしいと思います。ほぼお金かからないですし。